

無事 安穩

2009（平成 21 年）1 月

新年を迎えられましたことをお喜び申し上げます。

もちろん、中には、昨年、大切なご家族を亡くされて喪中の方もおられることでしょう。しかし無事に私たちのこの「いのち」が年を越すことのできたことは、当たり前のものであって、非常に大切な出来事です。そのことに素直に祝意を表したいと思います。

すでにお話したように、お釈迦様はこの世の中のことを「娑婆」（シャバ）と、呼ばれました。中国の人が音を聞き移したため娑婆の字が当てはめられていますが、元来外来語であることから「シャバ」とカタカナ表記すべきだったかもしれませんが、中国では翻訳語として「忍土」と書きました。つまり耐え忍ぶ場所と言った意味です。日本に娑婆の言葉が伝来しましたが、わかりやすい表現に翻訳すれば「苦しみの世界」といった意味になることでしょう。ですからドラマなどで罪を犯した罪人が牢獄の中から「早く娑婆の風にあたりたい」などという、まるで余程いい世界のように聞こえますが、ほんとうは、この世の中は我慢しなければならない世界だったのです。

「この世の中は、面白く楽しくなければ生きている甲斐がない」と考える人には、何もない平凡な毎日は「なんて退屈な、つまらない」と受けとめられ、一方、この世の中は「苦しみの世界」と思って生きるひとの平凡な一日は「有り難い、今日も無事に穏やかに過ごせた」と、感じられることでしょう。幸せは、外から与えられるものではなく、内面の心が感じるものだと、よく言われる真実です。

心を調え（ととのえ）、無事に、安穩に生きられる一年にしていまいりましょう。合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

喜びには 悩みが
悩みには 喜びが
なければならぬ

2009（平成 21 年）2 月

この言葉は、実はドイツの文豪・ゲーテの言葉です。しかし真理とは、洋の東西を問わず、等しく誰にも言い得ることだと教えてくれます。

社会は、経済的に大変苦しい時代になりました。誰もみな、さまざまな苦しみや悩みを抱えて生きなければならない状況にあります。失職、リストラ、減給等、安穩としてはいられない事態が、望んでもいないのに降りかかってくる。その中で、いつもと変わらない、もしくは上昇気流の中にあるというのは、なんと恵まれたことであると、感謝せずではおられないはず。しかし苦しみや悩みにぶつかっても、めげることはありません。お釈迦さまの「ご縁」の考え方によれば、人生は悲しみだけ、苦しみだけではないと教えてくれています。喜びを感じるためには、悩みが縁としてあり、悩みを感じるという縁は、喜びを感じる縁によって生じていると考えるのです。

それは例えて言えば「掌（てのひら）の裏表」みたいなもので、裏ばかりで表のないというようなことはないのです。深く苦しい悩みの中にある方は、きっとこの苦しみの向こうに喜びの光明が待ち受けていることを信じて、強く生きてまいりましょう。輝かしい喜びを感じている人には、永遠に喜びが続いていくことは考えられません。感謝と用心を忘れずに、身を慎んで生きてまいりましょう。合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

今日の私は
これまでの私
今日の私が
これからの私

2009（平成21年）3月

とんちのような言葉ですが、「今日の私というものは、これまでさまざまなことを積み重ねてきた私の行いの表れといえます。そして今日の私がどのように生きるか、このことによってこれからの私が決まってくるのです」ということを、短縮して表現したものです。

仏教では、私たちの行い、行為を「業（ごう）」という言葉で表現します。単純に言えば業には三種類あり、身業、口業、意業に分けられます。身業は、まさに身体で行われるところの行い、口業は、言葉で表現されるところの行い、意業は、心でどのようなことを思うのか、それも行いであると説くのです。たとえ、人を傷つけたことがない人でも、「あの人さえいなければ、どんなにかいいことか」と、誰かしらのことを阻害したり、亡きものにしたことは、あるのではないのでしょうか。

法句経というお経には、「諸々の悪をなすことなかれ、諸々の善をなせ。自らの意を浄よくすることこそ仏の教えである」と述べられています。年度の切り替えや、新しい節目を迎える3月から4月、どうぞ今一度、自分の行為を深く見つめて、仏さまの心を頂きながら生きていきたいと思うのです。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区） <http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

桜
咲き、散り、また来年
ひと
生き、死に、再会を願う

2009（平成21年）4月

今年も桜が咲きました。彼岸頃の冷えの影響もあって、ここ数年には珍しく4月になってからの満開です。もちろん花のいのちは短くて、このひと月のうちには、花を散らして緑の初々しい新しい葉を見せてくれることでしょう。

日本人の積み重ねられた精神性の仕業かもしれません。桜のいさぎよい咲き方、散り方を見ると、不思議に人間自身のいのちと比べたくなるものです。桜が咲き、散り、ひとが生き、死に、ものみな移り変わることの手本のような出来事です。ご承知のようにお釈迦様は、その悟りの中の一つの大きな柱として「諸行無常」と表現されました。「あらゆるものは移り変わり、常なるものはない」といった意味ですが、『平家物語』の「祇園精舎の鐘の声」や、『奥の細道』の「月日は百代の過客にして行き交うひとまた旅人なり」あるいは、「年々歳々、花相似たりといえども人同じからず」等、この無常を論じた言葉は多いものです。

今月の言葉「桜 咲き、散り、また来年 ひと 生き、死に、再会を願う」は、自然の時間の流れの中に逆らうことなく、桜の花は、咲き、散り、また来年の花を咲かすように、いのちはちゃんと続いていて、人間も生き、死にを果たした後、すべてが終わるのではなく、浄土、来世でまた会うこと「再会」を願って生きてこそ、人間のみができる生き方だということを伝えているのです。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

愛情のこもった
料理は 美味しい
人生も また
同じこと

2009（平成 21 年）5 月

いい季節になりました。新しい年度を迎え、さまざまな仕事や学業、取り組みに過ごされていることでしょう。取り分け 5 月は母の日、6 月は父の日が、なかなか親に感謝の思いを伝えることのできない私たちに、表現の機会として用意されています。

今、思い起こしても、母親の作ってくれた味噌汁、煮物は、素朴に美味しいものでした。決して高価な具財が入っていたわけではなく、物のない時代に粗末なものであっても、そう感じることのできたのは、なぜでしょう。他でもない、誰にも負けない愛情がこめられていたからではないでしょうか。コンビニで、デパートの地下で、通販で、ありとあらゆるものが手に入れることができ、何不自由のない時代に私たちは、有難いことに生きています。しかし、だからこそ愛情によって作られた美味しさに勝るものはないのでしょうか。愛情をこめることと手間をかけることは、異なります。何日もの手間はかかっている、愛情のない料理もあれば、あっという間に作られたものでも、愛情のこもった料理もあります。

実は、人生もこれと同じなのです。私たちは親の大切な愛情を受けて、育てていただきました。愛情のこもった人生を生きているはずが、上手くいかないことや、失敗に出会うと「こんな人生なんて」と、自暴自棄になってしまうことがあります。しかし失敗や挫折は、人生のいい肥やしです。この私たち自身が愛情をこめないで、誰がこの私の人生に愛情をこめるというのでしょうか。どうぞわが人生を愛しながら、慈しみながらこの毎日の生活を、人生を歩んでまいりましょう。きっとそれは「素晴らしい人生だった」と、感じられるような人生に仕上がっていくはずです。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

生きるのに 時があり
死ぬるのに 時がある
いのちとは
今を生きることなり

2009（平成21年）6月

梅雨の鬱陶しい季節です。それだけに、いきいきと元気に暮らしたいものです。

6月は、時の記念日（6月10日）の月で、時間に関する話題がよく取り上げられます。冒頭の言葉は、当たり前のように、なかなかそれが身につまされて尊く感じられることはないものです。

私たちが生きるのには、時代であれ、環境であれ、生きるにふさわしい「時」が必要とされます。また死を迎えるときもそうです。息を引き取るのに家族が看取る時間があったり、さようならの別れを交わす時間が必要となります。今年話題の映画「おくりびと」では、送る人だけでは死は成り立たず、そこには送られる人が不可欠です。さらには、送る人と送られる人とが共有する「時」があって、はじめて「よき看取り」は、成立するのです。

さらには、実はそういった一瞬一瞬の時間が積み重なって、紡がれていくところに「いのち」が存在するのではないのでしょうか。

言い換えれば、「いのち」とは、「今」という「時」を生きることこそ、「いのちが生きている」といえることになるのです。
あなたの身の回りの、つまらないなァと感じる時にも、意味があるのかもしれない。大切に生きていきたいと思います。 合掌

「いのちの理由」(1)
私が 生まれてきた訳は
父と母とに 会うために
愛しいあなたに会うために

2009 (平成 21 年) 7 月

7 月はお盆の月です。

この一年に大切な家族を亡くされたご家庭もあれば、いつものようにご先祖を偲びつつ、お参りをされるご家庭もあるかと思えます。

とりわけ家族のつながりを強く感じる季節でもあります。

こうして私が生まれてきて、今日に至っているのは、すべて父母から尊いいのちを頂戴できたお陰に他なりません。この私が生まれてきたお陰は親にあるのと同時に、この私が生まれてきた理由は、父や母に会うためであったといえるかもしれません。また縁あればこそ、夫婦となり、家族となる、大切なお互いに、愛しいあなたに出会うために生まれてきたともいえるかもしれません。

冒頭の歌は、浄土宗の開祖・法然上人が亡くなられて 800 年を迎える平成 23 年を記念して、大切ないのちのメッセージを歌手・さだまさしさんに浄土宗が委嘱して作っていただいた歌なのです。

(アルバム「美しい朝」に所収) 詞は次のように続きます。

「幸せになるために 誰もが生まれてきたんだよ 悲しみの花の後からは 喜びの実が実るように」

今年のお盆のお参り、大切な人とのいのちの出会いを感じながらお祈りしていただきたいと思います。 合掌

浄土宗・浄心寺 (東京都文京区) <http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

「いのちの理由」(2)
悲しみの花の後からは
喜びの実の
みのるもの

2009 (平成 21 年) 8 月

さて今月も、浄土宗の開祖・法然上人が亡くなられて800年を迎える平成23年を記念して、浄土宗がさだまさしさんに委嘱して作っていただいた「いのちの理由」(アルバム「美しい朝」に所収)の一節です。

そろそろ夏の終わりに、静かに過ぎし日々のことを振り返ると、いろんなことがありました。悲しいこと、つらいこと、ある時は「どうしてこんなことに私が出会わなければならないのだろう」と、神仏を恨むような出来事もあったかもしれません。

でもそれらのことを乗り越えて、静かに振り返ると、あのときのつらさは、私たちの人生のよい思い出になっているのではありませんか。

むしろあのときのつらさが、私たちを成長させてくれるきっかけ、ご縁となっていると感じておられる人は、少なくないはずです。

しかし悲しみや、つらい出来事のだ真ん中にいる人には、たまったものじゃないと、感じられるかもしれませんね。

お釈迦さまは、その修行のひとつに「忍ぶこと」をあげられています。耐えること、我慢することは、つらいけれど大切なことです。決してその状況が永遠に続くことはないのです。明けない夜はなく、花の後には、必ず実のなる季節がめぐってきます。まさに時間が必ず経過していくことを、諸行無常の法則として示されたのもお釈迦さまです。

今までつらかった人には、きっと喜びの実が実りますよ。
それを信じて、よき種を蒔いて生きていきましょう。 合掌

浄土宗・浄心寺(東京都文京区) <http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

抱かれてあるとも知らず
愚かにも我れ反抗す
大いなる御手に (九条武子の歌より)

2009 (平成 21 年) 9 月

テレビでは、教養がいかにあるかと、知識欲をかりたてるクイズ番組が大流行です。

雑学、話題等、いかに人よりも「知っているか」が問われ、多くの物事を知っていることが幸せや、人生の豊かさにつながるかのような風潮が見られます。

人は、より多くの知識を身につけることで、本当に幸せになれるのでしょうか？むしろ、自分のもつ知識や視界が広がったために、反って自分の存在が小さく感じられたり、むなしい思いをすることはないでしょうか。お釈迦さまの智慧は、ただ知識や学問を身につけることを問うものではありませんでした。

むしろ多くの余分なものを身につけることより、まなざしを自らの内面に向けることで、自分にとって本当に必要なものはなにか分別し、不要なものを捨てて、生きていくことを説かれたものでした。

十分に内省していくと、いかに自分という人間が、稚拙でたわいもないことに振り回されながら生きているか、気づかされるものです。自分ほど賢いものはない、といったうぬぼれではなく、本当に至らない自分が、ありとあらゆるもののお陰で生かされて、今ここにあることに気づくことができれば、望外の幸せが実感されてくるものだとは私は、体験的に感じています。

冒頭の歌は、まるで孫悟空がいくらもがきあがいても、所詮は、仏さまの手のひらの上での営みであったと、気づかされる話に似ています。

まだ仏さまの存在が遠くに感じられている人も、実は、わが身こそ、よく振り返ると、ちゃんと大きな仏さまの御手の上で、こっちに行った方がいいよ、と諭されながら歩いている日々であることに、気づくことができるかも知れません。

尚、九条武子さんは、明治から昭和にかけて、女子教育に尽力した、信仰の女性です。京都女子大学の創設に深くかかわった人としても、また歌人としても著名な人です。 合掌

浄土宗・浄心寺 (東京都文京区) <http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

極楽の 百年の修行は 穢土の 一日の功に及ばず （日蓮聖人「報恩抄」より）

2009（平成21年）10月

あれ、浄心寺は浄土宗じゃなかったかな？日蓮聖人の言葉など載せて、どうなっているのかな？と、思われる方がいるかもしれません。素晴らしい仏教の言葉は、宗派にこだわることなく紹介していきたいというのが、当山住職の考え方ですが、今月、日蓮聖人の言葉を紹介したのには、一つ訳があります。

10月から11月にかけて、浄土宗のお寺では「お十夜」という法要が広く行われます。

尚、これは「無量寿経」というお経の中に「十日十夜の間、この世の中において善行をなした者は、仏の世界において、千年の長きに渡って善行をなしたと同等の利益を得ることができる」という教えが説かれていることに依るもので、浄土宗独自の法要といわれています。

しかしどうでしょう、日蓮聖人もほとんど同じことをおっしゃっているではありませんか。「極楽で百年の修行は、穢土（穢れたこの世の中）において一日修行をした功德には至らない」というのです。これは、逆説的な表現で、いかにこの世の中というものが、善き行いをなすことが難しい社会であるかということ、教えています。仏の世界は、清浄な心の集まりですから、善き行いが当たり前であるのに対し、この世の中は、煩惱や迷い、執着が渦く世界ですから、善い行いをしようと思っても、なかなか行動に移すのは、難しいのが実状です。

換言すれば浄土宗であろうが、日蓮宗であろうが「仏の世界とこの世」とは、同じ考え方であるということが、よく分かる言葉だろうと思うのです。どうぞ思いついたら、一瞬の善行に、尊い価値があるのだと思って、実行に移す生き方をしてまいりましょう。

浄心寺では、10月14日にお十夜法要を、お勤めいたします。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

真実を 知らないものは
真実でない事を
真実だと 思い込む

2009（平成 21 年）11 月

さまざまな情報の氾濫する世の中では、何が本当のことなのか、気をつけてかからないと、大変な失敗をしでかすことにもなりかねません。ある意味でいうと、現代は情報を上手に利用したものが、勝者となる社会ともいえるでしょう。

しかしもっと大切な、この私自身がどのような人間なのか、自分には、どのような生き方をすることが、相応しいのか、十分に理解しえているかという、はなはだ不確かなものです。反って情報に振り回されてしまい、本当の自分らしい生き方を見失ってしまっている人も多いことと思われます。

お釈迦様以来、仏教は、取り分けその自己の内面を見つめることに重きをおいてきました。「仏道をなろうというは、自己をなろうなり」（正法眼蔵）と、道元禅師が述べたように、自分をしっかり見つめることこそ、先ずなすべきことといえましょう。

私の持つ歪んだこだわりを捨てて、正しく真実を知る姿勢から、本当のものが見えてきます。皆の世話になって、私が今日あること。皆の助けがあったからこそ、こうしていられること。親や多くの人に、守られながら、祈られながら今日まで生きてきたこと。それら本当のことに気がつかないという、自分勝手な見方で見たものを真実だと思い込んでしまうのです。

真実のものに気づけば、そこには自ずから、感謝の心が湧いてくるものです。真実のものにふれながら生きていけるような環境を整え、仏の教えに則した生き方をしてまいりたいものです。

※11月の言葉は、安田理深氏の言葉を参考にしました。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.

今年こそ 今年こそとて 暮れにけり

2009（平成 21 年）12 月

今年も残りわずかになってきました。心静かに振り返ると、よき出会いや出来事があった人、悲しい別れや辛いできごとに遭遇した人、さまざまな立場の方がおられると思います。喜びにつけ悲しみにつけ、印象深い出来事があった人にとって、年の瀬を迎えて、今年という年が過ぎていくことは、何とも気持ちの改まることだと感じているのではないのでしょうか。

私たちは、行く年を惜しみつつも、来るべき新しい年に「新年こそ」「今年こそ」と、新たな希望を感じるものです。いつもの一日が加わっただけで、カレンダーが新しいページに捲られたただけなのに、新年の希望は湧いてくるものです。これは昔の人々が、惰性で生きてしまうことの多い当たり前の人間のために、暦を変えていくことで心を新たに切り替えることができるように仕組んだ、生きるための仕掛けのようなものだったのかもしれない。

しかしさらに自分を凝視すると、今年の自分は、決して来年も同じ自分がいるわけではなく、今年の自分を取り戻すことはできません。新しい年を迎えることは、まさに一瞬一瞬、死に近づいている「生死一如」と言えるのです。新年の希望は、今年の反省の上に成り立つ」と言われます。年末の慌しい時候であっても、今年を振り返り、自らの所業を省みる時間を作りたいものです。

私たち日本人は、昔から大晦日に打ち鳴らされる除夜の鐘を聴いては、その年の出来事や自身のいのちを照らし合わせ、煩惱の除去を祈ってきたものです。除夜の鐘の余韻と過ぎ去ってゆく年を惜しみ、二度と戻らない時間やいのちを、心静かに思いやり、大切に見送るという作業を、一年の最期の夜に行ってきたのです。

このホームページをご覧の皆さんにとって、よい越年をされますことを、お祈り申し上げます。来年もよろしく。 合掌

浄土宗・浄心寺（東京都文京区）<http://www.jyoshinji.jp/>

Copyright © Jyoshinji. All Rights Reserved.